グローバル通信

特集「留学生からのメッセージ」

2016/04/30

NO.30

海城高校卒業後アメリカのグリネル大学に進学した大村君、高校 1 年で海城高校を退学してイタリアの UWC に進学した茂田君から在学生に向けてのメッセージが到着しました。海外で勉強に励む彼らの意気込みを感じ取って下さい。

2016.3 「アイオワ通信　改めまして第一弾」　　大村崇寛

＜自己紹介＞

皆さん、こんにちは。多くの方にとっては、はじめまして！ 2013 年に海城を卒業し、アメリカ、アイオワ州グリネル大学（Grinnell College）に進学し、現在三年生の大村崇寛です。実はこちらグローバル通信に何度か寄稿させていただきましたが、最近は途絶えてしまっていましたので、また久しぶりに書かせていただきます。アメリカでの生活が長く、日本語の文章が拙くなってしまいましたが（国語科でお世話になった先生方、申し訳ありませんっ！）、お読みいただければと思います。

さて、もう少し詳しく自己紹介をさせていただくと、現在三年生で心理学を専攻し、神経科学を副専攻しています（ 去年の夏から神経科学の研究を細々と行っています）。他には統計学や経済学も勉強しています。課外活動は、留学新入生向けオリエンテーションの企画・実行などを務めていました。来年度からは、International Student Organization（留学生中心の学生組織）のリーダーを務めます。

では、皆さんは「アイオワ」をご存知でしょうか？海城生諸君なら、すぐに「コーンベルトに位置し、アメリカ国内トウモロコシ生産量一位の州！ 」とお答えするでしょう。保護者の方々なら、「マディソン郡の橋って映画の舞台！」とお答えするかもしれません（？）。つまり何を言いたいかと言うと、アイオワは特に何もない「ど」田舎なのです。僕の部屋から徒歩 15 分あればトウモロコシ畑にたどり着くと思います。

じゃあ、なんで僕はこんな田舎の大学に？それは、グリネル大学が非常に優秀なリベラルアーツ大学だからです（秋田の国際教養大学を想像されるとわかりやすいかと思います）。1600 人程の小規模な大学で、学部教育だけを行っています。その学部教育に非常に力を入れており、少人数制授業、質の高い教授陣、多様な留学生（実に学生人口の 15%を留学生が占めます）、などなど、とても魅力がある大学です。

＜グリネル大学の教育とは＞

- 少人数
  - 一クラス多くてせいぜい 25 人。上級クラスになれば、5 ～ 10 人。こんな環境では、嫌でも授業中発言しなければいけません。クラスによっては授業中の発言が成績の 25%を占めるなんてことも（僕の取った大戦史の歴史がそうでした…）。
  - 全校で 1600 人程度。これしかいないので、教授にきめ細やかな指導を受けることができます。2 ～ 3 ページのレポートに対して約 1 ページのフィードバックを書く教授も…
- 質の高い、熱心な教授

  夜 10 時に質問のメールを送ったら、1 時間後に長々と返事をしてくれる教授も。また、レポート提出前、二度、三度とミーティングを重ね、その度に厳しいコメントをし、論理が通るまで僕を徹底的に責める教授も。このように、非常に熱心な教授が数多くいます。

これはただの一例であり、グリネルの教育を簡単に語ることはできません。ただ確かに言えることは、グリネルでは、基礎的である「論理的に考え、それを伝える力」が嫌というほど徹底的に刷り込まれるということです。

＜これまでの留学生活で得たもの＞

先ほど述べた論理的な思考力は多少なりとも身についたと思うので、それはともかくとして、他に身についたものは：

- 忍耐力

  教授の高い要求に応えるのは大変です。山のような宿題を、毎日夜中の 2 時まで起きて終わらせるのは苦痛です。本当に頑張って書いたレポートの成績がいまいちの時はショックです。また、優秀な友人が鼻歌を歌いながら解くプログラミングの問題が 3 時間も解けない時は悔しいです。このような、厳しい環境に晒されれば、それなりに忍耐力はつくものです。僕は、自分の高校時代では考えられなかったような辛い時も歯を食いしばって頑張ればどうにかなる、と気付きました。
- 自主性・積極性

  アイオワでは、「機会」というものは空から降ってきません。自分を高めるためには、自分で行動するしかありません。ただのほほんと生活していてもしょうがないので、未知なことにチャレンジしていく積極性が身につきました。
- 友人

  やはり、何と言っても大切なのは人と人のつながりです。ニュースでしか知り得ないようなことを、直接友人に聞けること。多様な考えに触れることができること。海外旅行をしたら、友人が家に泊めてくれること。日本国外に友達を作っておけば、いいことがいくらでもあるわけです！（綺麗な外国人の彼女を作るなんてことも夢ではありません、海城生諸君）

＜失ったもの＞

- 時間

  「自分の時間」なんてものはほとんど存在しません。勉強、研究、課外活動、バイトを普通にこなせば、それで一週間は終わってしまいます。特に前の学期では気が狂いそうになるほど忙しくしてしまったので今学期は少し控えていますが…
- 日本食

  グリネルに日本食レストランなどありません。自分で料理するしかないでしょう。ただスーパーに置かれているものは限られていますが、頑張ればそれなりに日本食は食べられます（魚介以外で）。ですが、学期中に料理をする暇と気力を探すのが大変で…

＜最後に＞

正直に言いますと、留学経験は辛いです。毎日課題の提出期限やテストに追われ、友人の優秀さがプレッシャーになり…でも、留学して楽しいか？と聞かれればハイと迷いなく答えます。辛い中で何かを達成した嬉しさ・喜びはひとしおです。

「あー、大変だけど頑張ってきて良かった！」

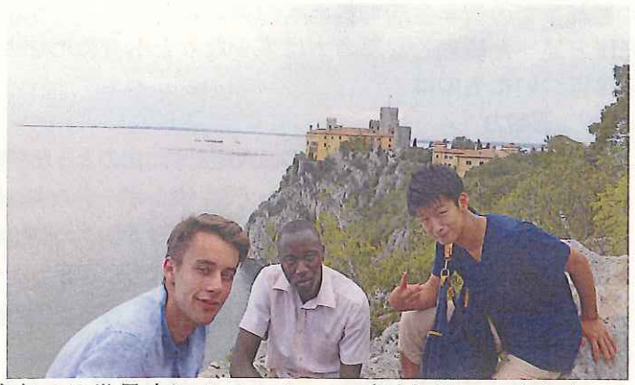
僕の目標は、卒業式でそう思えるように今、必死に努力することです。

…ではまた今度！（何か質問等あれば、グローバル教育部春田先生に僕の連絡先を遠慮なく聞いてください。）グリネル大学三年　大村

UWC アドリアティック・カレッジ（イタリア）報告　　茂田　治樹

日本を離れ、イタリアに来て８ヵ月が過ぎました。この８ヵ月は早かったような、そしてとても長かったような…不思議な気持ちがします。

学校について



ここで、僕の通っているUWCアドリアティック・カレッジについて少しお話しします。

UWCはUnited World Collegesの略称で、異文化理解を目的として設立された国際学校です。世界約 80 カ国から来た 16 ～ 19 歳の生徒が 2 年間、勉学や課外活動を共にします。日本では経団連が試験を実施し、奨学金を給付し、世界各国のカレッジに奨学生として派遣する活動を行っています。2015 年の時点では世界中に１５のカレッジがあり、日本から 19 名の生徒が派遣されました。そして今年度は派遣される人数が２２名と（若干ですが）、多くなるそうです。

僕は本当に運良く、アドリアティックカレッジで学ぶ機会を得ました。このカレッジはイタリアのドゥイノ村というアドリア海に面したところにあります。スロベニアとの国境にも近い場所です。ここではカレッジ独自のキャンパスはなく、校舎、図書館、寮などの施設は村の中に点在していて、ドゥイノ村自体があたかもカレッジのような雰囲気です。だから自然と村人と接する機会が多くなります。

カレッジが位置する村ドゥイノでは、突然大雨が降ったり、青空が広がったりと天気が変わりやすいことから、天気予報が当たることはほぼありません。冬にはボーラというアルプスからの強風に苦しめられることもありますが、それを除いては年中おおむね穏やかな気候です。冬の現在もあまり寒くなく、比較的暖かい毎日です。

寮生活について

全体で約２００名の学生が所属しており、７つのレジデンスと呼ばれる寮があります。寮の規模は様々で、こぢんまりした小さな家のようなレジデンスから５０名を超える生徒が一緒に暮らす大きな寮まで、とてもバラエティに富んでいます。

僕は３人部屋で、ルームメイトは南スーダンとポーランドのルームメイトです。とても仲が良く、快適に楽しく生活しています。朝食は各自寮で、昼食・夕食は Mensa と呼ばれる食堂でとります。イタリア校の食事はパスタやリゾットなどイタリアの食文化を反映したものからベジタリアン向けの野菜中心のものまで様々な種類があり、どれを選ぶこともできます。またドゥイノ村やその付近に点在する様々なレストランやピザ屋さん、バールと呼ばれる喫茶店などで食事をすることもできるため、バラエティに富んだ食生活を楽しめています。…が、やはり日本食が非常に恋しくなっています。当たり前ですが、掃除、洗濯など身の回りのことは自分でやります。洗濯の干し方など、以前は知らなかったことも多く、何度かＴシャツの襟を伸ばしてダメにしてしまいました（笑）。

勉強について

授業は英語で行われますが、イタリア語も必須です。

日本と比べこちらのクラスは小規模です。１クラス平均して１０―１５人ほどで、生徒がそれぞれの授業の教室に移動するという形をとります。

科目は自分で選択することができ、理系科目は物理、化学、生物、E-system（環境学科）の中から、文系は歴史、経済、哲学、環境学科のなかから選ぶことができます。また各科目ハイヤーレベル、スタンダードレベルとあり、自分の興味に応じてレベルを選ぶことができます。

国際バカロレア（IB）のプログラムに沿って、科目を選択していきます。IBディプロマプログラム課程を２年で終了し、修了試験に合格すると、IBディプロマを取得することができます。これは世界の多くの大学で入学資格として認められています。

IB のプログラムには、主要科目（言語、社会科学、自然科学、数学、選択科目）だけでなく、一般教養や卒業論文、社会奉仕活動なども含まれています。

社会奉仕活動などの行事について

学校では社会奉仕活動を少なくとも週１回行うことが義務付けられています。私は現在水曜日にダウン症の方をサポートする活動を行っています。一番大変なところはイタリア語でのコミュニケーションです。英語がわからない方々と接するため、自分のたどたどしいイタリア語を使っていろいろなアクティビティーなどの活動をしなければなりません。イタリア語の会話スピードがとても速く大変ですが、イタリア語の良い修行場となっております。

また先日、「Project Week」というものがありました。１週間を学校外で過ごし、社会奉仕活動をするというものです。先生は付き添うことはなく、生徒のみでアパートなどを借り、共同生活をします。私はオーストリアのウィーンに行き、そこで行われる癌で闘う人々ためのチャリティーマラソンに参加しました。そしてそのマラソンでは賞をほとんどみんなもらいました。（もちろんこのようなおいしい話には裏があるのですが笑笑）

結局チャリティーマラソンに参加する高校生など滅多におらず、また賞は年齢別に配られていたので、走ったら最低年代別ランキング３位には入れるという大変便利な仕組みになっていたのです。

最後に・・・

冬休みは日本には帰らず、ヨーロッパの友人宅にホームステイをさせてもらいました。イタリアのサルデーニャ島で３週間、ポーランドで１週間ほど過ごしました。サルデーニャはイタリアの南の島で、大変暖かく冬でも１５度の気温がありました。しかしポーランドはマイナス１５度の極寒だったため、ポーランド到着初日から具合が悪くなってしまい大変でした。ポーランドではアウシュヴィッツ強制収容所を訪れました。第二次世界大戦中、このアウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所にて 110 万人以上の人々が命を奪われたそうです。収容されていた方の顔写真がずらりとならんでいて、囚人用の窮屈な寝床や、ガス室などを目の当たりにして、戦争のこと、平和のことなどたくさんの事を考えるいい機会になりました。

世界中から集まった仲間と寝食を共にしていると、育った環境や宗教観などが全く異なるにも関わらず、意気投合しあい、心から理解しあえる友達にたくさん出会えました。お互いの国について興味を持ち、みんなが集まるとどんな場所でも不思議と議論が始まり、国際問題、環境問題などについて熱心に話し合っています。みんな世界で起きている問題に関心を持ち、自分は一体何ができるのかを常に考えています。そのような友人達の姿勢に毎日、とても刺激を受けています。

もしもUWCに興味がある人がいれば、ぜひ高校一年生という一生に一度しかない受験チャンスに挑戦して、世界中に友達を持つ素晴らしい機会をつかんでほしいと思います。僕がUWCに応募する際に、海城の先生方が応募書類の添削や、面接の準備などとても熱心に指導してくださいました。先生方のご指導なくしては、UWCで学ぶことはなかったと思います。最後に春田先生をはじめ、山口先生、上村先生、本当にありがとうございました。貴重な機会を与えてくださった方々に感謝しながら、少しでも成長できるようこれからも日々精進していきたいと思っています。